

津田昇平教話 第二二話

令和三年一月二二日 朝の教話

今まで長う痛うてつらかったことと、今おかげを受けてありがたいことと、その二つを忘れなよう

おはようございます。令和三年一月二十二日をお迎えさせて頂きました。ここ数日は、「信心のはじめを忘れなよ」というご理解を中心にながら、同じような思いで教祖様が氏子うぢこにお話を下さっている内容を、何日間かに分けてお話させて頂いてきました。

今日もそのようなお話をさせて頂こうと思っんですけれども、有名なご理解が一つございますので、そこを紹介させて頂こうと思います。

ある方が、信心されて大変なおかげを頂かれた。で、お礼参りに行かれたんですね。その方が、

頭をたたみ畳にすりつけて言葉も出ず、夢中むちゆうでお礼を申しあげていたら、金光様が、

「丑うしの年、ありがたいかや」

〔理 I 萩原須喜 六より抜粋〕

「丑うしの年」とは、この方は丑の年に生まれたということと、教祖様は誰々だれだれさん」といふふうな表現というのではなくって、この当時は、「あなたは」って言う時に、丑の年に生まれた方のことを「丑の年」といふことですね。「丑の年に生まれたあなた」っていう意味なんですけど、

「丑うしの年、ありがたいかや」

とおたずねになった。そのお言葉につられて、ようやく、

「金光様、もう何も申しあげられませぬ」と泣くばかりであつた。金光様は、まことにおやさしい声で、

「そうかそうか。それは何より結構じゃ。よく、おかげを受けなされたのう。こんなにありがたい心に早くなれば、二か年も難儀なんぎせんでもよかつたのに。もう、今まで長う痛うてつらかつたことと、今おかげを受けてありがたいことと、その二つを忘れなよう。その二つを忘れさせにや、その方の病氣は二度と起こらぬぞよう」

【同】

というご理解ですね。

私も、お取次とりつぎの中でもお話の中でも、よく申し上げる教えの中身だなあと思うんですけど、ちょっと昔の言葉遣いですけども、『天地は語る』でもね、よく現代語訳にされて載っておりますし、またそのみ教えで引用されることも多いかと思えます。「今まで長く痛くて辛かった、苦しかったことと、今おかげを頂いてありがたいということと、その二つを忘れないようにしなさい」と。「その二つさえ忘れなければ、もう二度と病気にはならんよ」ということですね。

このみ教えは、年頭のみ教えの中にもあったんじゃないかと思うんで

すけれども、もう復習に近いかもしれないんですけど、「これまで苦しかったことと、今おかげ頂いてありがたいことと」「これはね、これまで苦しかったという事実はもちろんなんですけども、苦しまざるを得なかった、その当時の自分の生き方、心のあり方、性根しじみね、それも忘れないようにとということなんです。ただ苦しかったというだけじゃなくて、苦しむということは、苦しむような生き方、心、性根しじみねになってたわけですね。それからまあ前々の巡り合わせめぐりあわせもあって、そうならざるを得なかったということもあるにしても、でも現実としてその人が生きていく上では、その生き方では難儀なんぎにならざるを得ないような、立ち行くおかげ、助かるおかげ、救って頂くおかげを頂けるような、そういう器うつわ、心の器はできてる状態

じゃなかったわけですね。だから、今まで長くて痛くて辛くて苦しかったということは、すなわちそういう生き方、心の器、性根になっていたということ、それを含めて忘れないようにということなんですね。ただ苦しかったことだけ事実として忘れないだけということじゃなくって、そうならざるを得なかった当時の自分の生き方、考え方、心のあり方、そういったものも一緒に忘れちゃいかんよということ。つまり自分の失敗談ですわね。そのミスを忘れんようにせんといかんということですよ。まあ軽く言うつとね。

もう一つは、そこから今おかげを受けて、ありがたいおかげを頂いて、今この方はお礼参りに来られて、涙々でありがたいばかりで、もう言

葉が出てこないくらいにありがたい気持ちばかりでねえ、涙にむせて……ということになってるわけですね。その方に対して教祖様は、「これまで苦しかったことと同時に、今おかげを頂いてありがたいこと」と言っただけですけども、「おかげ頂いてありがたいなあ」と、「それを忘れたらいかんよ」と言うだけではないんですよ。むしろ大事なのは、本当に大事なのは、今おかげを頂いたってことは、おかげを頂くような信心にならして頂いているということなんです、今ね。そのようなおかげを頂ける生き方、心、性根を、初めてお参りして信心するようになってから、教えて頂いた教えを心にかけて生活をされ、わが身わが一家を練習帳にされて、お参りした際には稽古けいこをつけてもらって、その中で

んだんと、おかげを頂けなかった当時の器から、少しずつ穴をふさいで
きれいにして、少しずつ大きくしてって、そしておかげを頂ける心の器
というもの。考え方ですよ、考え方も含めて生活しぶり。神様と共に
生きるというその生き方、感謝申し上げたり、お断り申し上げたり、お
継りすがしながら神様と共に生きるという、人間らしい本来の生き方を教え
て頂きながら、だんだんと取り戻もどしていかれた。その結果としておかげ
を頂いているわけですから、今おかげを頂いてありがたいことを忘れる
などというのは、「おかげ頂いてありがたい、ありがたい」って、そこだけ
じゃだめなんです、これ。そういうおかげを頂けた信心、頂けるように
なるために意識して稽古してきた中身、心の器ですね。信心そのもので

すけども、それを忘れないようにして下さいよ、と。どちらか一方でも忘れてしまったら、せっかく今頂いてるおかげは落として、また同じ難儀になってしまう。同じ病にまた戻ってしまう。ここには書いてないですけど、今は申し上げてないですけど、このあと続くんですよ。自分がね、おかげ頂いて助かったと。じゃあ、人のこと、苦しんでいる人のことを見て祈ってあげなさいと。「自分はもうおかげ頂いたからもうそれでいいわ、人のことは結構や」って、そんな心になったらまた同じ病に、元に戻るよってことを仰ってるんです。これ、根っこが切れてるわけじゃないんですよ。一時、^{ほんとう}神様が今取って下さってるって考えた方が正しいでしょうね、この状況から考えて。

「病」っていう一本の木で考えたら、神様が一時つかんで下さってる。それが三年五年十年かけて、本当に根から切って頂く。ってというのはね、裏を返したら、それだけの年数をかけて、おかげを頂ける器というものを、しっかりとこう確定していくということなんですよね。

お参りされてる方の中でも、歯の矯正おとぎほというのは何人かいらっしやるんですけど、皆さんご本人だったり、親御さんだったりがお届けされると、歯の矯正器具をつけて歯がグッと動くんですよね。正しい位置に歯は動いていく。その時は痛いわけですけども、でもそれを直す。ある程度動いていくと痛みは減って、きっちり正しい位置に行く。でも放っておくと、それで「ああもうきれいになった、もう直った」と思っ

もし歯につけてる器具を全部取ったらどうなるかということ、すぐに元に戻っていくんですよ、これね。私も小学生の時、矯正器具つけてましたんでね、痛かったですよ、あれね。数日かどれくらいやったか忘れませんが、ある程度ぐっと動いてちょっと痛みが治まったら、ずいぶん動いているわけです。「これでよかった。痛いのかなわんし、色々引っかかるし、口から血が出るし。そんなんやったらもう外した方がいいわ、きれいに整ってるやん」と思って外したらこれ、あてが違うんですよ。また元に戻ってしまうんです。だからこれ、本当に確定するには何年もかかるわけですね。

これ同じことで、信心もおかげ頂く、最初一生懸命に、信心はじめて

しつこくやる

ね、信心のはじめは、ただただおかげ頂きたい、直して頂きたい、救って頂きたい気持ちで信心しますんで、その時は熱心にほれ込んで信心する。だからおかげは頂ける。そういうおかげを頂けるような、信心にして頂けますから。お祈り添え頂いてね、真剣ですから。でも、ある程度したらおかげを頂ける、それは歯がきれいに揃そった状態でしょう、いったんね。でもここで、「よかったよかった、もうこれでいいわ」と思って、信心を緩ゆるめるってことは、歯の器具を緩めて取ってしまうという感じでしよう。じゃあどうなるかって言ったら、元に戻りますわね。元々の状態に。

それと同じで、せっかく神様のおかげを頂ける生き方、性根になっていたのに、これでもう大丈夫やと思って油断をしたらどうなるかと言う

と、おかげを落とすような自分の生き方、心に、だんだんだんだん、ズルズルッとずれていくんですよ、気が付けば。そうしたらどうなるかって言うと、歯が元通りになるような、矯正する前の状態に戻るように、自分の心も、歪ゆがんだ状態に戻っていく。そうすると、おかげを頂く器と
いうのが、せっかくその時整えてもらっても、すぐに元に戻ってまた穴
があいて、またいびつになって、また崩くれて……ってなってくるわけで
しょ。だから「信心のはじめを忘われなよ」っていうのは、過去のことって
いうより、忘れないようにし続けていかないと、今頂いているおかげも
あなた落としちゃうよ、ってことなんですよ。

今日のみ教えも、「今まで長う痛うて辛かったことと、今おかげを受け
てありがたいことと、その二つを忘れないように」と。「その二つさえ忘
れなければ、その病というのはもう二度と起こらんでいいよ」と。そう
でしょうね。いや本当にそうやと思います。

よくね、私は教えをする時に、昔の時代なんで、水筒みづいしというのはね、魔
法瓶まびんの水筒みづいしみたいのはないわけです。何を使っていたかということ、竹な
んです。竹の一つの節ふしなんですよね。それを使って水筒代わりにしてお
られたので、そのことに例えてよう言っんですけど。竹の節と節があり
ますね、そこでカットする。上も下も。節ふしで蓋ふたされていますから。で、そこ
に穴を開けて栓せんで閉めるわけです、何か詰めてね。で、ここに何かお茶

なりお水なりを入れておく。で、水筒代わりにしとくんですよ。

でもこれ、もしですよ、この蓋の部分に穴が開いたと。あるいは蓋が取れたと。どっちか一方でも蓋が取れた状態やったら、どうなるかという事です。これまで苦しかったっていうことはもう忘れる、つまり苦しかった時の自分の生き方も忘れてしまう。これ、片方の蓋が外れたらどうなるか？ 中にお茶を入れてても、普通に生きて歩いてたら、まあ中のお茶は全部こぼれていくでしょうね。走ったり、もう一度よいしょって、またね、肩からずれそうになるからっていうので、落ちんようにと思って肩にもう一度かけ直すだけでも揺ゆれて、お茶こぼれるでしょうね。あるいは、苦しかったことは覚えてるけれども、今おかげ頂いて

ありがたかったこと、これ忘れてらどないなるんかって言うこと、もう片方の蓋が取れるでしょうね。

つまりどちらか一方でも蓋が取れてしまうと、中のお茶は全部こぼれるわけです。つまりそれ、頂いているおかげ、せっかく詰めてもらって
るおかげは、どっちか一方の蓋が取れただけでも、人生を普通に歩いて
るとね、ただそれだけでも、もうぼとぼとぼと、これ取れてっいて
くんですよ。跳ねて飛び散ってね。せっかく神様が、「信心頑張がんばっとるし、
おかげ頂く器ができるようになったから、おかげ注いどくわ」って注い
てくれたのに、しっかりと大事に、両方から蓋してね、これまで苦しか
ったことと、今おかげ頂いてありがたいことと、おかげを頂いてありが

たいなあと思えるような、そういうおかげが頂けるような心を作って、お稽古けいこして、人間としての正しい生き方を学んで、稽古をして、わが身わが一家を練習帳にして、そしてやっと、蓋ができたからおかげを注ぐことができるわ、「よし、これでいいよ」「って、「しっかりと蓋しとくから、もうこれ勝手に外したらあかんで」「って。」「どっちか一方でも蓋取れたら、もう中のお茶全部落ちるで、おかげ全部落ちるで。だからそないならんようにな。これまで苦しかったこと、今おかげ頂いてありがたいこと、難儀なんぎせざるをえなかった自分の心、おかげを頂くことになれるようにお稽古してきた、その自分の心のあり方、それをどっちも忘れたらいかんよ。両方蓋やからね」「って、仰ってって下さってるんですね。

おもしろいのは、この前後があるわけですけど、そこまで全部はゆっくりとは見てませんけれど、お礼申されたら金光様がね、「よくおかげを受けなされたのう」「って仰って喜ばれるわけですけども、その時に、「こんなにありがたい心に早くなれば、二か年も難儀せんでもよかったのに」「って、こつやってひと言仰ってるんです。

「よかったねえ、そのおかげも落とさんようにな。辛かったこと、今おかげ頂いてありがたいこと、忘れんようにな」で済んだらいいんですよ。私やったらそれで済みそうなもんですけど、金光様は水を差すわけじゃないですけどね。だってもう二年苦しんできて、今更どうこうできようがないんですけど、わざわざ仰ったんですね。「こんなにありがたい

心に早くなれば、一二年も難儀せんでもよかったのに」って。水を差すようにひどい言多いうって考えるか、いやいや本当のことで、わざわざまた言うて下さったって思うか。でも、この方はどう頂かれたか。まあありがたく頂かれたんでしょうけれども、後々教えとして残して、私たちが頂く分には、このひと言はありがたいですね。そこにまたおかげを頂くヒントがあったんでしょう。この方がどういうことで難儀をされて、どういうふうにしておかげを頂かれたのか、それは詳しくまた教典読んでみたら、出てくるとは思います。ちょっと私はそこまでのことはよくは読んでないですけど。でもここに「ありがたいなあ」と、今お礼申されてる、その心に早くなったのであれば、この人の体の病は、もっと早

く治ってたよっていうことを仰ってる。これ、「おかげは和賀心わがこころにあり」
ってありますから、おかげを頂くという中で、この人、痛い辛いってな
ったわけですから、なかなかありがたいと言にくいですよ。それは
そうなんだけれども、教祖様は、「ここまで頂いてきた天地てんちの道理どうり、天地
から恵んで頂いてきたおかげにもうちちょっと目え凝こらしてごらん」と。
痛い辛いというところに目が行ってしまっって、そこにフォーカスされて
ね、そこがクローズアップされて、なんか真っ暗になってしまっってたん
かなあ。そやけど、神様のおかげはたくさん頂いて、おかげの中に生ま
れ、おかげの中で生活をして、おかげの中に死んでいく。おかげにとっ
ぷり、その中で今難儀なことになっとなる。難儀を色々してしまうような

自分でも、それでも神様はいっぱい愛情を注いで下さって、かわいいかわいいと思ったださっている。ただこちらの器が足りてないから、それを「今、器を作る稽古をして行こう」って仰って。

だから、こんなにありがたいっていう心に早くなったんやったら、もっと早くおかげが頂けたかもしれんなあって仰ってるわけですけどね。

まあそれがなかなかそう簡単じゃないというのがまあねえ、うじこ氏子の側で考えたら、そこをありがたいと思えるのはなかなか時間がかかるんでしようけれども、でも無理と思わずに、あきらめずにお稽古されたんでしようね。そろそろです、信心はお稽古ですから。できるからするっていうんじゃ、全然お稽古いりませんからね。できないからこそ、できるよ

うにお稽古するのが習い事ですから、だからありがたいところを頂いて、神様のおかげ頂いてありがたいところを大切に、それを心でも感じられるようにお稽古をしていこうということなんでしょう。実際そのお稽古ができるようになってきて、心の方が、思考が、生き方が、先に器ができますから、その器ができて、そうするとその器に注いであげるといことが出来るわけですね。

これはまあ、この方は体ですけど、人によっては、それは心の難儀だったりお金の難儀だったり、人間関係の難儀だったり、色々あるわけですけど、でもおかげを頂く器っていうのはやっぱり同じでね、気付かせて頂くということ。自分という人間が、至らんということだけじゃなく

って、自分を取り巻いている、この世界、天地、宇宙というものは、神様の愛で満ちてて、神様の^ご慈愛^ごで満ちてて、その^ご慈愛^ごに^あ貫^ぬかれて、自分の命は存在しているということ。自分の命の中も外も、神様の^ご慈愛^ごでいっぱいであって、その中に生まれ出て、その中で生活させてもらって、その中に死んでいくんだ、って。だから、今の今もおかげを頂いているんやで。苦しいかもしねんけど、でもそこをまず気付かせてもらってらん。まず、その心の目を開いてらん。目えちゃんと開けてらん。神様の^ご慈愛^ごいっぱいの中で、生活させてもらってんねんで。肉眼ちょっと置いて、目に見えるところのしんどいことちょっと置いて、心の目ちょっと開いてらん。分かるんちゃうか。それ分かったら、今大変な

ことはあるにしても、でもそんな中でも、おかげの中でのことなんやなあって気付かせて頂いて、ほんまやなあ……って思うて、心からお礼申せるようになってきたら、そしたらおかげを頂く器ができてくるんですよ。

おかげを頂いたからありがたいっていうのはこれ、人間として普通なんです。でもこれ、信心してなくても皆、そろそろでしようね。信心して必要はないような気はします。おかげを頂いたからありがたいじゃなくって、ありがたいからおかげが頂ける。「おかげは和賀心わがこころにあり」です。でもそのおかげを頂いたらっていうのは、自分が願ったようなおかげを頂いてありがたいって、これはさっきも言ったように、誰だれでも思

いますわ。信心なくてもね。

でも大事なことは、気付いていないおかげ、実はすごいたくさん頂いている、神様のご慈愛いっぱいね。その自分が十分に気付けていないおかげに気付かせて頂いて、こんなにおかげ頂いてきたんやということに気付かせて頂くことによって、器ができるし、器ができれば、今苦しんでる難儀も救って頂けるようにおかげを注いで頂ける、という順序でしようね。

だから、この一つのみ教えだけですけれども、こんなにありがたい心に早くなれば、もっと早くね、そんなに苦しんでも良かったのに、っというふうにしてわざわざ仰っておられたのは、この方に対しては、そ

のように仰って下さってたということとは、まずこの方にとって大事なの
は、大変な中でもおかげを頂くために、神様のおかげ、お徳、ご慈愛、
思し召しおぼめ深いね、その中にあなた、命を頂いて生活させてもらって、そ
して死んでいく、そんなお恵みの中でのことなんやで、って。まずそこ
に気付いて、「ああ、ありがたいなあ」ということに気付かせてもらって、
目を開いてね、器を作っていらんっていうところが一つ課題だったんで
しょうね。ただ信心するって言うても、どんな信心？ってなった時に、
気付かせて頂くということ、目が開かれるということ、というところが大
事やったんでしょうね。

「信心のはじめを忘れなよ」という教えから、またこうして繋がる教えをね、お話させて頂きました。今日は今日でまた神様から新しい一日を頂戴ちやうじつだいしておりますので、それぞれの背景は違ちがうにしても、今日一日、また神様に心を向けて、神様のご慈愛じあいの中でお恵みの中で暮らさして頂いておりますから、それをよく味わって、味わうのは今しかできませんからね、今味わって、そして今日一日をお礼を申し上げながら、丁寧に過すごさせて頂きたいなあと思います。

どうぞおかげを頂いて下さい。よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第二二話

令和三年一月二二日 朝の教話

令和五年四月三十日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
